界論のある種の平板さを照射してもいる。現在のモラルのリアルなありようを捉えるという社会倫理学的な課題にもつながるだろう。

この〈コミュニズム〉論に触れたとき、想起されたイメージがある。ジョルジョ・アガンベンが『到来する共同体』（月曜社、二〇一二年）で引く、ヴァルター・ベンヤミンがエルンスト・ブロッホに語ったとされる、メシアの王国についての寓話である。あるラビがこういったという。「平和の王国を樹立するためには、いっさいを破壊し、まったく新しい世界を開始する必要はない。この茶碗かあの若木、あるいはあの石、そしてすべての物をほんの少しわきへずらすだけで充分だ。だが、実行しようとなるとこのほんの少しが実にむずかしい。またその尺度を見つけ出すのもとてもむずかしく、世界に関係のあることがらについては、人間たちは何もなしえないのであって、メシアが到来する必要があるのである」（六九―七〇頁）。わたしたちは、このラビが教えるように、すべてを委ねられるメシアを待つわけにはいかない。全知の何者かに委ねることなく、限られた知識しかない者たちが寄り集い、今ある諸要素のあるべき配置について試行錯誤を繰り返すしかない。

研究とは本来、そういう営みであり、またそれはグレーバーのいう〈コミュニズム〉的な原理によるべきものだと思う。現状、大学を中心とした研究条件は、人員削減による多忙化と、やみくもに成果を要求しその数を競争させるといった、〈コミュニズム〉とは対極の方向性を強いている。そういう全体状況が押し付ける困難に対抗しながら持てるかぎりのものを持ち寄り、互いの考えを〈知的「財産」などともったいぶらずに〉披露しあい、その中で生じないではいない間違いをゆるしあいながら、誰の所有物でもありえない知を共に紡ぎつづけること。そういう知の〈コミュニズム〉が本研究会でもすすめられることを願う。



特集

# マルクス生誕200年

## ポスト・キャピタリズムへ

趣意書

「資本主義の終焉」をめぐる議論が活発になっている。ヴォルフガング・シュトレークやナオミ・クライン、水野和夫といった非マルクス主義者からも、資本主義の限界が指摘されるようになり、時代が大きく変わりつつあるのを感じる。

リーマンショック時の経済危機において露呈した現代資本主義の根本的な問題は、なにひとつ解決されないまま、大規模な金融緩和と財政出動という延命措置がとられた。一〇年後のいま、再びバブルの崩壊が近づきつつある。

また、世界中で異常気象が伝えられ、気候変動は一線を越えてしまった感がある。それが資本の無際限な増殖活動と密接な関係をもつことは明らかであろう。しかし、例えば化石燃料関連企業は、気候変動そのものを疑問視するキャンペーンを展開しつつ「シェール革命」をさらに推し進めようとしている。米国トランプ政権がパリ協定からの離脱を表明したのは、化石燃料関連業界の意向をふまえたものであることはよく知られている。

さらに、世界で進行している格差・貧困、雇用の不安定化などの問題は、資本のグローバルな運動そのも

のが引き起こし、深刻化させるものである。たとえ、企業の社会的責任が重視され、ＥＳＧ投資などが主流になったとしても、利潤原理が存続するかぎりは解決不可能であろう。生活者・労働者を保護するために国家的・国際的な種々の介入が不可欠であることは確かであり、私たちがそれを粘り強く要求しなければならないのはもちろんである。しかし、そのような国家的・国際的介入は、資本主義的国家・国際システムの枠組みにおいては、とりわけ財政面で大きな限界に直面している。

このようにさまざまな場面で「資本主義の終焉」が強く意識されるもとで、マルクス理論のアクチュアリティが世界中で再認識されるようになった。とくに、若い世代がマルクスを真摯に学ぼうとしている。例えばベルリンでは、ローザ・ルクセンブルク財団主催のマルクス２００と題された巨大イベントが二〇一八年五月二～六日に開催された。七九ものワークショップが設けられ、世界各国の若者が熱心に議論を交わした。しかし日本では、若者のマルクス離れがいまだに続いているのかもしれない。岩波ホールは、創立五〇周年記念として、ラウル・ペック監督の「マルクス・エンゲルス」（原題：The Young Karl Marx）を上映し、連日満員であったが、観客の圧倒的大部分は高齢者であったという。

冷戦終了後、いわゆるマルクス＝レーニン主義の枠組みから離れて、マルクスそのものを再検討することが求められ、その試みが内外で活発になされてきた。日本でも近年、モイシュ・ポストン、ミヒャエル・ハインリッヒ、ケヴィン・アンダーソンなどの著作が翻訳され、マルクス再読の必要性が認識されている。

振り返れば、第二次大戦後の思想的潮流の中で、早くからマルクス＝レーニン主義を相対化する努力を重ねてきたのが、東京唯研である。そこでの研究成果は世界的に見ても非常に高い水準にあり、共同著作としては『マルクス主義思想　どこからどこへ』（時潮社、一九九二年）、『戦後マルクス主義の思想――論争史と現代的意義』（社会評論社、二〇一三年）などに結実した。とくに『経済学・哲学草稿』や『ドイツ・イデオロギー』など初期マルクス研究を得意分野とし、マルクス理論の根本規定を実践的唯物論





として明示した。その方向性は、疎外論の意義を把握し、アルチュセールや廣松渉らの言説を鋭く批判しうるものであった。また、東京唯研は、主体－客体の弁証法として生活過程を捉える視座を重視してきたが、それは、深刻化する今日の環境問題・労働問題などを分析するための重要な立脚点になるものであろう。

本特集は「マルクス生誕二〇〇年」に際し、これまでの東京唯研の研究成果をふまえつつ、近年の活動実績を整理し、今後の進路を検討するために企画された。六本の論文と一本の研究ノートからなる。最初の二本は、分厚い研究史・論争史のあるヘーゲルとマルクスの弁証法についての論考である。ドイツ人研究者 Eva Bockenheimer 氏と島崎隆氏は、二〇一七年一〇月に開かれた、精神現象学読書会と東京唯研共催の国際カンファレンスで議論したが、それをもとに、改めてお二人に寄稿していただいた。前田庸介氏と菊地賢氏は、東京唯研の研究蓄積にもとづき、対象化や疎外、イデオロギー批判というテーマを丁寧に再検討している。長島功氏の論考は、疎外論と物象化論の区別と連関について、後期マルクスの議論もふまえた意欲的なものである。羽島有紀氏は、マルクスの地代論から現代的エコロジー論を読み取っている。エコロジー・マルクス経済学は、東京唯研がこれから開拓すべき研究分野であると思われる。松田博氏の研究ノートは、グラムシの「獄中ノート」とマルクス理論の関係に注目している。今回の特集は、海外の研究者に寄稿を依頼しただけでなく、若手研究者二名（菊地氏と羽島氏）にも執筆陣に加わっていただいた。東京唯研会員の年齢構成の超高齢化と若者のマルクス離れに危惧を覚えたからである。著者の見解がそれぞれ異なる点もあるが、東京唯研におけるマルクス研究のさらなる活性化につなげていきたい。

明石英人（東京唯物論研究会　運営委員）